

上尾にあった 県立農業試験場



写真1 農事試験場正面(昭和21年) 中央奥に3本のヒマラヤ杉が見える



写真2 上尾運動公園西側のイチョウ並木とヒマラヤ杉



愛宕三丁目に所在する上尾運動公園は、昭和42(1967)年に開催した第22回国民体育大会埼玉大会秋季大会(埼玉国体)のために、昭和40(1965)年から昭和42年にかけて建設された。敷地面積約9万9千平方メートルの広大な土地に、陸上競技場、屋内体育館、サブトラックの3施設を有する。現在でも多くの人々に親しまれているこの場所には、かつて県立農業試験場があった。

埼玉県は明治33(1900)年4月、農作物の試験研究や農家の生産指導を目的として、大里郡玉井村(現熊谷市)に県立農事試験場を創設し、同時に北足立郡浦和町(現浦和市)に付属陳列所を設置した。大正10(1921)年には、玉井の試験場を種芸部と改称し、農事試験場は浦和町に移転した。

浦和駅から東へ約200メートルの所にあった農事試験場の用地は、全て5年ごとに契約の更改が必要で、大正12(1923)年の関東大震災以後浦和町の都市化が進展、住宅地の増加に伴い契約の更改が難しくなり、昭和になるとさらに困難を極めたことから、移転を余儀なくされた。

昭和7(1932)年、埼玉県

は農事試験場の移転を決定し、移転先は上尾町になった。畑と山林で9割近くを占めていた用地を整理し、本館、講堂、宿舍、農芸化学舎などを設置し、昭和8(1933)年4月に業務を開始した(写真1)。この頃の農業技術としては、原動機類の普及が目立ち、栽培面では新品種や化学肥料が登場した。農事試験場の試験でも、育種・栽培・農機具の試験をはじめ、水稻の品種改良や栽培に関する試験、麦類新種改良、雑穀類の栽培試験などの他、化学肥料の効果や使用方法に関する研究も行っていた。また、昭和25(1950)年には、農事試験場を「農業試験場」と名称を変更した。

その後、昭和30年代以降に加速した、市域への工場進出などにみられる都市化に伴い、農業試験場は熊谷市に移転することになった。そして昭和40年、上尾の試験場は廃止されるやいなや、中山道と国道17号に挟まれた立地条件の良さなどから、国体の会場建設地として選ばれ、上尾運動公園へと姿を変えていった。中山道から陸上競技場へと通じるイチョウ並木や、その正面にあるヒマラヤ杉に農業試験場の面影を残している(写真2)。

(上尾市生涯学習課)

コラム column

国体初の選手村～シラコバト団地の建設～

埼玉県に国体を招致する問題点の一つに、選手の宿泊施設の整備があった。埼玉県では、国体選手を収容するような宿泊施設が十分ではなかったため、この打開策として、選手村建設の構想が立ち上がった。国体の開催が決定すると、県は選手村を上尾市大字上と熊谷市大字久保島に建設した。

上尾市に建設された選手村は、昭和42(1967)年10月に開村式が執り行われ、6万4,800平方メートルの敷地に、5階建て22棟、550戸分が建てられた。各部屋の設備な

ど、公団住宅と全く同じ規模であった。なお、熊谷に建設されたのは72戸分であり、上尾の選手村の大きさが分かる。

22棟はサクラソウ村(男子村10棟)、シラコバト村(女子村7棟)、ケヤキ村(男子村3棟・役員2棟)に分かれており、千人が一度に利用できる食堂や管理事務所の他、臨時の電報電話局や郵便局、診療所や銀行なども併設された。

国体終了後、この選手村は特別県営住宅シラコバト団地(写真3)として運営され、現在に至っている。



写真3 シラコバト団地